

## 藤原松三郎

### 『東洋数学史への招待 藤原松三郎数学史論文集』

2007年、藤原松三郎先生数学史論文刊行会編

東北大学出版会刊行、土倉保、鈴木武雄編纂

高瀬正仁（九州大学数理学研究院）

昨年夏、京都大学の数理解析研究所で行われた研究集会「数学史の研究」に出席しており、鈴木武雄先生の講演「藤原松三郎先生と平山諦先生〈時代に生き、時代と格闘し、遺したこと〉」を聴講し、林鶴一、藤原松三郎、平山諦と続く東北大学三代の和算研究史の概要を教えられて感銘が深かった。歴史研究にもまた歴史があり、和算史研究の場には、和算史家たちの人と研究の歴史が息づいている。菊池大麓の支援を受けて『大日本数学史』『増修日本数学史』を著した遠藤利貞、帝国学士院に拠って各地の和算書を調査し収集した三上義夫、和算家の川北朝鄰から関流八伝免許状を授与されたという林鶴一、その林鶴一の遺業を継いで和算研究に深く分け入った藤原松三郎、東北帝大に設置予定の和算研究所の所員候補者であった平山諦等々、和算と和算史そのものとは別に、明治維新以降、日本の近代史の流れに立ち現れた和算史研究家たちの群像に、強い関心を誘われたのである。

いかにも強烈な個性の持ち主ばかりが打ち揃い、どの人物もひとりひとり興味が深い、同時に緊密な学問上の交友ぶりもまた看取された。人と人との距離が近いのである。遠藤利貞の『増修日本数学史』を編纂したのは三上義夫であり、補筆改訂は平山諦である。林鶴一の和算研究の集大成『林鶴一博士和算研究集録』は平山諦が編纂した。およそ8000枚という藤原松三郎の膨大な遺稿「日本数学史」を清書し、『明治前日本数学史』の定稿を作成したのも平山諦であった。鈴木先生は晩年の平山諦の薫陶を受けた和算史家である。

数学史京都会議の後、和算と和算研究史と和算史研究家のあれこれににわかに興味がつり、平山諦の『和算の誕生』、鈴木先生の『和算の成立』、三上義夫の『文化史上より見たる日本の数学』などを読み、どれもおもしろかった。そうこうするうちに平山諦の古い作品『和算の歴史』が復刊され、ちくま学芸文庫のM&Sシリーズに入るという出来事があり、続いて藤原松三郎の数学史論文集『東洋数学史への招待』が刊行された。あまりにもタイミングのよい廻り合わせであった。

『東洋数学史への招待』には合わせて28篇のエッセイと論文が収録されている。巻頭に配置された回想記「余の和算史研究」の末尾を見ると、「昭和21年5月31日稿」という日付が見る者の感慨を誘う。翌6月、藤原松三郎は病床につき、秋10月、永眠したの

である。「一つの記録」は東北帝大開学記。「和算」は、昭和 20 年 9 月 25 日に行われた東北帝大学士試験合格証書授与式での記念講演の記録。「和算に現はれたる我が國民の歸納力」と三連作「和算」「和算（其二）」「和算（其三）」では和算の概説に併せて、和算に寄せる見識が表明されている。これで 7 篇になる。和算史の研究論文は計 15 篇あり、通し番号が附された論文「和算史ノ研究」が 13 篇。「其十三」は遺稿である。英文の論文は 2 篇あり、それぞれ和算におけるディオファントス近似の問題と逐次近似法が取り上げられている。ほかに日本中等教育数學會の第二十回総会での講演記録「支那數學」と、連作「支那數學史ノ研究」が 5 篇あるが、連作 5 篇のうち、ⅢとⅣのテーマは朝鮮の数学史である。

藤原松三郎は東北帝大に理科大学が設置されるのを受けて教授候補者として洋行し、洋算、すなわちヨーロッパの近代数学を学んだ人であり、『行列及び行列式』『常微分方程式論』『代數學』『微分積分學』等々、今も一読に値するすぐれた著作を遺している。ところが昭和 10 年秋 10 月、同僚の林鶴一の死去という出来事があり、これが契機になって林鶴一所蔵の大量の和算書への関心も起り、和算研究に心を寄せ始めたという。藤原の生年は明治 14 年（1881 年）であるから、このときすでに 54 歳である。いったい和算書はどのくらい存在するものなのか、どんな書物が著されているのか、「かかる基本的な研究さえまだ完了していないのである」と、終戦後間もない時期に藤原は往時の心情を回想した。

藤原松三郎は、和算の基礎文献の目録作成、和算書の実物の蒐集、和算の系統図の作成などを心にかけて、林鶴一、三上義夫、遠藤利貞たちの和算史の研究論文を読むことから和算研究に入った。第一着手は、関孝和の業績に支那数学の影響がどこまで及んでいるかを精査することで、関孝和の剪管術は楊輝算法の系統を引いていることを明らかにし（和算史ノ研究、同タイトルの連作の第一論文）、関孝和の招差法は「天文大成管窺輯要」に拠ったという三上義夫の説を裏書することにも成功し（同上）、さらに関孝和はホーナーの方法（組み立て除法による代数方程式の近似解法）を完成の域に高めたことを認識した（和算史ノ研究、Ⅳ）。第二の目標は「我邦に移入された支那算書の調査」だったが、この方面にも収穫があり、和算研究への熱意はますます高まったという。

こんなふうにして晩年の 10 年ほどが経過したが、大戦下の仙台で繰り広げられた孤高の和算研究の消息は、「余の和算史研究」の末尾に附せられた平山諦の「附記」に懇切に描かれている。わずかに 1 頁ほどの摘記にすぎないが、本書を一読してもっとも心を打たれる部分である。平山諦によると、藤原松三郎の和算研究は昭和 12 年ころから始まったが、昭和 15 年、すなわち皇紀 2600 年に際会して帝国学士院の日本数学史の編纂担当となり、それからは「一切の餘事を避け文字通り寝食も忘れて和算史の研究に精進した」という。昭和 18 年 1 月 11 日、この日を期して日本数学史の第 1 頁を書き始めた。「自分

には正月も盆もない」といって朝から書齋に閉じ籠り、およそ 8000 枚の原稿を書き上げたが、昭和 20 年 7 月 9 日の深夜、仙台空襲の危難に見舞われた。藤原家に大型の焼夷弾が 4 個落下し、母屋と書齋に 1 個ずつ命中して全焼した。台野原に難を避け、明け方になって帰途についたが、8000 枚の原稿は焼けてしまったと観念し、「日本数学史を記憶で再び書き直す決心だった」と後に平山諦に語ったという。真に鬼気の迫るエピソードである。「關孝和以來和算發達の有様が走馬燈の如く先生の頭に往來した」と、平山はこの朝の藤原松三郎の心情を忖度した。

幸いなことに原稿は防空壕に仕舞われていて無事だったことがわかったが、戦争の継続中のことでもあり、山形の田舎に移すことになった。平山諦が運んだのである。7 月 18 日、10 余貫の原稿をリュックサックに詰め、両手にさげた平山の姿を見送った藤原松三郎の眼には、「安堵の涙さへ輝くように見えた」という。和算研究の継承を象徴する美しい別れの情景である。

藤原松三郎は和算家の全集の出版を企図し、実際に『關孝和全集』の編纂を遂行した。およそ 150 頁ほどの書物に約 10 頁の解説をつけ、帝国学士院監修、藤原松三郎編という形で刊行する考で、出版社も日新書院と決まり、100 頁余の校正刷も出るまでにこぎつけたが、諸事情が思わしくなく、この計画は頓挫した。平山はこの経緯を紹介したうえで、「關孝和全集は和算の基礎でわが民族としては決して失つてならぬものであります」と述懐し、「若しこれが印刷になる見込みなければ、私は謄写版等の方法で印刷して置きたいと思います」と意志を継ぐ決意を表明した。後年、平山は協力者二人を得て『關孝和全集』を編纂し、出版したが、そこには藤原松三郎の心が生きて働いていたのである。

多くの研究論文と通史執筆と全集出版の試みのほかにも、歿後、およそ 2000 枚ほどの支那数学史の調査資料が遺された。何がこの尋常ならざる熱意を支えたのであろうか。

近年は和算研究が非常に盛況で、毎夏恒例の数理研の数学史研究集会にもいろいろな方面から多くの和算史家が参集し、講演を重ねているが、戦前の研究史とのつながりがときおり気にかかることがある。關孝和の歿後 300 年を間近に控え、新たに全集編纂の企画が進行中と仄聞するが、藤原・平山版の全集との関連もまた気にかかる場所である。それと、藤原松三郎は日本の和算研究の状況に憂いがあったようで、エッセイ「和算 其三」の末尾に、

「唯うらむ所は現在我邦の若き學徒を容るべき一助手の席さへ缺如してゐることである。かゝる状態がつゞけば、遂には和算を理解する人が存在しない時代の出現を恐れるのである」

と、将来を危惧する言葉を書き留めている。和算を理解する人は増えていると思われるが、大学の数学の研究科に和算史のみならずヨーロッパ数学史の専門家も欠けている事

態は、藤原の歿後、60年の歳月が流れた今も変わらない。江戸期の和算史と今日の数学研究との関連を考えると、和算には「日本のギリシア」の可能性が秘められているのではないかと思う。ディオファントスの『アリトメチカ』の断片（全13巻中の6巻）のギリシア・ラテン対訳本がフェルマの数論を誘ったように、膨大な和算書を自在に参照しうる環境があれば、愛読する若い世代の中に「日本のフェルマ」の出現を期待することができるのではあるまいか。関孝和、建部賢弘をはじめ、和算書の現代語訳が強力に押し進められることを、今日の和算史家に切望する所以である。

藤原松三郎の和算研究は、何かしら「悲願」という言葉が相応しいパッションに包まれている。このたびの論文集が世代を越えて広々と行き渡り、研究者の強烈な個性に根ざした戦前の和算研究の姿が回想される機縁となるよう、心から期待したいと思う。